

「日本住血吸虫中間宿主」 宮入貝撲滅記念碑

2021年、新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）の感染爆発に翻弄された年であった。感染症は、環境中（大気、水、土壌、動物等）に存在する病原性の微生物が、人の体内に侵入することで引き起こされる疾患に他ならない。我々の周りには、常に目に見えない多くの微生物（細菌、ウイルス、真菌）が存在し、その中で、感染症を引き起こす微生物が病原体と言われる。感染症を防ぐには、病原体を発見することと共に感染経路を断つことが重要な言うまでもない。かつて日本で地方病として恐れられた日本住血吸虫症と言われる寄生虫病があった。原因となる寄生虫は、日本住血吸虫でその幼虫はミヤイリガイという巻貝の体内で成長し、その後ヒトをはじめ数種の哺乳類に寄生する。日本住血吸虫の中間宿主として、巻貝のミヤイリガイを特定した宮入慶之助（1865～1946年）が寄生虫学発展の功労者であることは、本欄の九州大学¹⁾で触れた。

日本住血吸虫症は、わずか10mmほどのミヤイリガイ（写真1）という巻貝を中間宿主として、河水に入ったヒト等哺乳動物に皮膚より日本住血吸虫の幼虫（セルカリア）が寄生、皮膚炎を初発症状として高熱や消化器症状といった急性症状を呈した後に、成虫へと成長した日本住血吸虫が肝臓や脾臓に巣食い慢性化、多数寄生して重症化すると肝硬変による黄疸や腹水を発症して死に至る疾病である。

福岡県の筑後川流域は、利根川下流域の茨城県、富士川流域の山梨県甲府盆地、芦田川流域の広島県深安郡神辺町と並ぶ日本住血吸虫病の有病地であった。筑後川流域では、対策として日本住血吸虫症患者の早期発見と治療、感染予防対策を行うほか、用水路への薬剤散布等で、宿主のミヤイリガイや最終宿主であるハタネズミ等の駆除を実施していたが、根本的な解決はミヤイリガイを人為的に絶滅させる以外方法はなかった²⁾。そこで、筑後川の河川管理者である国土交通省九州地方建設局は、治水事業の一環として実施している河川整備としてミヤイリガイ撲滅を併せて目的に取り入れた。具体的には河川敷をコンクリート護岸に整地することで、ミヤイリガイの繁殖に適するススキ原や湿地帯を埋め立てて生息地壊滅に追い込むことであった³⁾。

宮入貝供養碑には、「我々人間社会を守るため筑後川流域で人為的に絶滅に至らされた宮入貝（日本住血吸虫の中間宿主）をここに供養する」と刻まれている。



写真1 ミヤイリガイ（昭和47年甲府市で筆者が採取）



写真2 宮入貝供養碑（久留米市宮ノ陣町）

昨今は、地球上の自然環境の適正な保全や動植物については生態系の多様性の確保が訴えられる中で、ミヤイリガイの絶滅はあくまでも日本住血吸虫病撲滅のための手段に過ぎず「種として絶滅」に至らされた供養碑である（写真2）。

この日本住血吸虫症という恐ろしい病気を克服し、その終息宣言がなされたのは未だ記憶に新しい1996年である。殺貝剤の散布、河川の護岸、火災焼却、農作物の転換等寄生虫の撲滅に向けて一体となった医師、研究者、行政、地方住民の取り組みの成果であった。

新型コロナウイルス感染流行に収束の兆しが見えない今、この感染症を制圧、終息し、コロナウイルス撲滅記念碑の建立を祈念してやまない。

参考資料

- 1) 諸澄邦彦, 大学構内に残る医療史跡, 九州大学, *Isotope News*, 648, 39(2008)
- 2) 藤木篤, 環境保全と公衆衛生の相反, 筑後川流域における日本住血吸虫病撲滅事業, 久留米工業高等専門学校紀要, 第29巻第2号(2014)
- 3) 恒吉徹, 筑後川総合開発と完成後30年を経た筑後大堰～筑後川のめぐみに感謝して～ <https://www.water.go.jp/honsya/honsya/pamphlet/kouhoushi/topics/chikugo.html>

(日本診療放射線技師会 諸澄邦彦)